

折野
Kana Orino
加奈さん

Profile

おりの かな (22歳・新野町出身・東京都町田市在住)

小松西高等学校を卒業後、大阪学院大学を経て三井住友海上火災保険に入社。高校2年から6年連続で徳島駅伝に出場し、区間賞(2回)や優秀競技者賞を受賞。阿南市の女子エースとして活躍。大学では、女子の副キャプテンとしてチームを牽引。ハーフマラソン、30kmロード、マラソンで学内歴代1位の記録を持つ。好きな食べ物はシュークリーム。休日はショッピングを楽しむ。尊敬する人は高橋尚子さん。

人としても愛されるランナーになりたい

アテネ、北京五輪日本代表の土佐礼子さんに見初められ今年4月、三井住友海上火災保険に正社員として就職した。徳島駅伝では女子のエースとして活躍。「多くの人に支えられて今の自分があります」と、感謝の気持ちを胸に実業団ランナーとしての一歩を踏み出した。

会社では企業営業第二部第二課に所属し、事務を担当している。「月曜から土曜日まで、朝と昼の2部練習をこなしています。人の多さと標準語に早く慣れたいです」とほほ笑む。

第60回記念徳島駅伝での活躍は記憶に新しい。初日の女子エース区間(16区4・9km)で、名だたる社会人ランナーを抑え見事、区間賞に輝いた。「去年は体調不良で不本意な結果に終わっただけに、うれしかったです」と声を弾ませた。

収穫はそれだけではなかった。招待選手の木崎良子選手(ダイハツ)との夢の競争も実現した。「めっちゃ早かったです」と興奮気味に話す折野さん。世界を舞台に戦うトップアスリートのオーラを肌で感じ、もつと上をめざしたいという気持ちを強くした。

陸上との出会いは小学4年のとき。シドニー五輪で高橋尚子選手が見せた歓喜のゴールシーンに心を動かされた。バレーボールに打ち込む傍ら、駅伝大会などで活躍し、走る楽しさを感じる。

「根っからのスポーツ好きで、練習を休んだことは一度もありません」と母、百合子さん。今も競技の根底にある「負けん気」と「ねばり」を身に付けたのは、この頃だった。

本格的に陸上を始めたのは高校から。「屋外での練習に慣れるまでが大変でした」と戸惑いもあったが、実力者の走り方を観察して技術を学び、楽しむことで力をつけていった。2年生で団体メンバーに選ばれると、素質が花開き始める。

大学は、あの高橋選手を輩出した大阪学院大学へ。名将、志水貢一監督の下で走りの技術を磨いた。

「大学の練習はきつく、ついていけるか不安でした。周りからの刺激は大きかったと思います」

同期は3人。その中に名門、須磨学園のエースもいた。強い仲間も自分の可能性を引き出してくれる戦友でもある。2年生で憧れの全日本大学女子駅伝を経験する。監督から勧められた「ウオーキングジョグ(1分間に200歩のペース)」でフォームを確認しながら、無駄のない走りを目指す。高橋選手らが名を連ねる学内歴代記録を次々と塗り替えていった。

熱い走りとは対照的なのはその人柄。濃厚で笑顔には少しあどけなさが残る。趣味はファッション。休日は友人とよく買い物に出掛けるといふ。「オンとオフの切り替えを大切にしています」と、ひとたび陸上から離れると普通の女の子に戻る。

卒業を間近に控えた3月9日、自身初めてのフルマラソン(名古屋ウィメンズ)に挑戦した。出場した大学生の中ではもつとも速い2時間33分51秒でゴール。「今までのレースで一番きつかった。気持ちが途切れたらそこで終わり。我慢し続けた分、達成感はとても大きかった」と振り返った。

どちらかといえば長距離が好き。体力もさることながら強い精神力が求められる世界だ。大学3年生の終わりに、足をけがして練習から遠ざかったことがある。その時、少しでもチームの力になりたいと、誰よりも早くグラウンドに出て練習の準備に汗を流した。4年生になってからも続けた。陸上と向き合うひたむきな姿勢が、折れない強い心を育てている。

夢は、日本代表選手になって世界で活躍すること。小学校の卒業文集にそうつぶつた。チームには渋谷陽子選手も在籍し、心強い存在となっている。「今は、地道に練習を重ねて一步一步進むだけ。自分の走りでも応援してくれる人を喜ばせたい。人としても愛されるランナーになれたら」と、力強く語ってくれた。